

風 光

有 森 信 二

坂の入口に掛かるあたりから、道の両端に（高級住宅第
五次好評分譲中）の幟が現われ、最後のカーブを上り切る
まで続いた。

一番手前の洋風住宅の庭にテントが張られ、（三笠ホー
ムモデル住宅）の表示がある。住宅前には、揃いのグリー
ンのシャツを着た若い女性たちが立ち、通り掛かりの車に
笑顔で旗を振る。テントの中には、パンフレットや記念品
が積まれ、朝日を受けたモデル住宅のサッシガラスに、緑
の濃い山肌が映っている。

今回は、五十区画の分譲だとかで、奥まった位置が販売
対象らしい。六十坪から八十坪の宅地に、四LDKで、吹
き抜けも、片屋根も、車庫もある。初期の分譲区画らしい
道路沿いの一帯は、落ち着いた銀鼠色のスレート屋根を、
整然と並べている。

妻が溜め息をついた。私も身を乗り出す。窓から流れ込
む空気が、涼しい。

「下りてみましようか」気配を察したらしい田尻さんは屈
託なく言い、モデル住宅をいくらかやり過ぎ、近くの公

園前の空地にバンを乗り入れた。田尻さんと、長男の純一を含む私たち家族三人は、スレート屋根の通りの角に立った。いく分勾配がきついが、道は十分広い。

妻が傍のレンガ壁の家を見上げ、ふうーと、また溜め息をついた。胸の高鳴りの音がそのまま伝わってくる。片屋根、スレート葺き、四LDK、芝生の庭、車庫付き。どれもがすべて彼女の願望を満たすのだ。妻は、純一をレンガ壁の玄関近くに立たせた。坂を三十分近く上ってきたためか、車酔いで青ざめた顔の純一は、浮かない表情である。

「少しスピードを出し過ぎましたね」田尻さんが、頭を掻く。いいえとんでもない、と妻はあわてて田尻さんに頭を下げ、浮かない表情のままの純一の手をひいた。「四千万円から六千万円」私は分譲案内板の価格を一人読む。最安物件でも、予定の価格より二千万円も高い。

妻は、分譲案内板に背を向けた位置に純一といて、田尻さんの説明を聞いているらしい。私たちが求めるのは、街の中心部から二キロ以内。敷地が五十坪。四LDK。それに、純一の病院や学校に足掛かりのよいところで、二千五百万円以内、という条件を満たすものとなる。

この坂の上の住宅団地は、街から五キロはゆうにあり、しかも七曲がりのカーブを経て、この価格である。

業界最大手「積分ハウス」の営業マンである田尻さんは、

最初、都心に設けられている住宅各社総合展示場内の積分ハウスのモデル展示場で、私たちの示す条件を聞いて大きく唸った。そんな話めちやくちやです、という声が田尻さんの頭の中を駆け巡っていたのに違いないのであるが、三呼吸ほどおいた後、大丈夫です、やってみましょう、と軽快な答えを返してきた。

ポカンとしたのは私たちの方で、条件を切り出す前、二階建延べ五十坪という瀟洒なモデル住宅の一間一間を案内してもらい、建物だけで四千万円近くになるという説明を聞いたばかりだった。であるから、田尻さんが私たちのどこに感応したのか、いや、なにかとんでもない思い違いをしでかしたのではないかと訝った。

「土地と建物を合わせて、という意味ですけれど」念を押す私に、四千万円の建物を背にした田尻さんは、当社はお客様の幅広いニーズに、可能な限りお応えできるよう努力いたしております、とさらに軽快に答えた。

同じユニット系の「興英住宅」には、ほんの十数分前、まるで用はないとばかりにあしらわれ、モデル住宅から出てきたばかりで、やはりマイホームなど自分たちの及ぶところではないし、出る幕ではないのか、との思いで恐る恐る入った積分ハウスなのであった。

田尻さんは、少しくせのある頭髪が垂れ掛かってきた眼鏡を左指で持ち上げ、眼鏡の奥の目を大きく見開くと、必

ずご期待に沿えるよう努力しますと言いながら、幅広の上体を四十五度に倒してお辞儀をした。

田尻さんから最初に電話をもらったのは、積分ハウスの展示場を訪れてから二週間ばかり経った頃だった。

田尻さんの軽快な返事のこととは忘れたわけではなかったが、あまりの軽快さに、あれは営業マン特有のリップサービスだったのではないか、との思いをうち消すことができなかった。それに、二週間という時間のこともあった。二週間といえば、あるいはという期待を抱き、待ち、待ち疲れ、どうして期待などしたのだったろうという気持ちに至るに、十分過ぎる時間だった。

実際興英住宅で体よくあしらわれたショックもあり、しばらく住宅のことなど口にする気にもならなかったのだが、一週間が過ぎたあたりから、また新聞の折り込み広告を広げ始めた。妻も同様で、時間をかけて探せば私たちにふさわしいものが見つかるかもしれない、と言い始めた。もっとも、総合展示場の各モデルハウスの潇洒なイメージをふり払うのに、さらに二、三日を要したのではあったが。

要は、純一の病院のことを考え、街の中心部から二キロという場所で、後はできれば敷地が五十坪程度あればよいとなると、やっぱりこの界限を足で丹念に歩き、地元のいい工務店に出会うことだと腹を決め、折り込み広告の物件

を二件ばかり訪ねてみた。

そんな晩、田尻さんからの電話が入った。出た妻は、殆ど予期していなかったこともあり、最初積分ハウスの田尻といわれても、ピンとこなかったのだという。かなり長い電話を終えた妻は、上気した顔で食卓に戻ってきた。

「ずい分お待たせして申し訳ありません、ですって。二週間、こちらの条件に合う土地を探し、希望に沿ったモデルを当たっていたそうなの。明日は日曜日だから、よかったら現地にご案内いたしましょうか、ということ。OKしちやったけど、いいかしら」

「田尻さん、覚えておいてくれたのかあ」

私の返事は、間の抜けたものになる。実際、自分たちの足でこまめに探そうとついきましたが決め、積分ハウスなどの大手には縁がないと話し合ったばかりだった。その私の逡巡を見てとったのか、「ひよつとして、なんとかなるかもしれないわ。それも業界最大手の積分ハウス。田尻さん、すごく熱心なの。一度、土地を見てほしいということだから、行ってみる価値あると思う」妻は一人で領き、椅子でキョトンとしている純一の頭を軽く撫でた。

私たちがマイホームを探し始めたのは、純一が自家中毒を頻繁に発し、その度に点滴を二、三昼夜も打たなければならぬ羽目になるからであった。純一の自家中毒は、満

一歳の誕生日の晩にひき起こしたのが最初で、はじめ、食べたケーキやスープを激しくもどすのを、一晩手をこまねいて見ていた。翌朝、すぐに小児科に出向いたのだが、症状を診た医師は、即座に妻の暢気さを語気荒く詰ったという。

「吐くときが一番です。下手をすると、脱水症状から脳が侵され、死に及んでしまいます」

純一は、その下手をすると、の一手前までできていたという。その場で即入院となり、一日十本近い点滴を夜昼なく打ち続け、五日目の昼にようやく退院した。

一回目はほうほうの体でなんとかしのいだのだったが、間をあげず二回目がやってきた。それが終わるとすぐに三日目、という具合で、その間近さに小児科医の方が首を傾げる始末だった。念のため、総合病院や、大学病院での精密検査も受けることになった。が結局、自家中毒という病気のものが、精神的なバランスの崩れに起因するものらしく、もって生まれた気質にもよるが、なにより周囲が本人へのストレスを与えないことが一番だということだった。

風邪をひかせないように、という注意もあった。純一はいつも喉を腫らしており、ちょっとした気温の変化や換気の具合で鼻水を流し、それが自家中毒を呼ぶのだという。

回が重なると、純一を連れて点滴に走る妻の方がおかしくなってきた。母親が余計な心配をただけで、子供が敏

感に反応するということは頭では分かっている、体の芯が心配してしまう。部屋が暑過ぎはしないか、寒過ぎはしないか。着るものは大丈夫か。食器の汚れはちゃんと落ちたか、と。一時、妻の神経が異常をきたしたのではないかと思うことが幾度となくあった。哺乳瓶を煮沸し、何度も洗い、また煮沸し、ということを一時間近く繰り返した。肌着は五回も六回も脱水し、またすすぎ洗いに戻して脱水し、という具合に洗濯にも途方もない時間をかけた。勤めから帰って、部屋の電気が点いていないのを不審に思ってから居間に入ってみると、食卓に座り、うなだれた妻がいる。近付くと、青ざめた顔で包丁の刃を、瞬きもせずに見詰めている。思わず私は、激しく妻を抱きとめた。

そんな夜は、決まって純一の発作が始まるのであるが、医師は、自家中毒は学齢に入ると殆どが卒業してしまいうすから、と妻のあまりのふさぎようになだめに入った。それに、ある程度基礎体力がいたら、住まいを空気のきれいな場所に移すということも結構効果が期待できますと言った。

あれから五年。純一は、年に十回程度の入退院を繰り返した。私たちの方も慣れてきたとはいえ、夜中過ぎに純一がぐずり出すと、二人はあわててとび起きた。そして、そのまま小児科に直行、入院、点滴というコースをたどる。

一年前の純一が満五歳のとき、最初に住んだ二DKのアパートが老朽化のためとり壊されることになり、同じ区内の現在の公団住宅に越したのであるが、マイホームを探そうという計画を持ったのも、この引っ越しがきっかけとなった。引っ越しという環境の変化で、純一の神経にいらぬ緊張を強いるのではないかと、十分注意をしていたのであるが、意外なことに、一月間その気配はなかった。

さらに一週間、二週間と、純一はなにごともなく日を過ごした。棟の近くに小さな公園があり、その砂場が気に入ったのか、毎日昼間の時間を砂場で過ごした。妻は最初、砂や泥を吸い込んだり、被ってしまうのを鼻や喉の粘膜に障るのではないかと心配していたが、本人がいたって元気なので、次第に公園に連れ出す時間が長くなった。

「部屋に閉じ込め、無菌室で青白く育てるから神経が細くなる。子供はだいたい、泥まみれ、汗まみれになって一日中外で遊ぶもんだ」私は、上機嫌で言った。県の図書館に勤めるといふ仕事柄、理由があれば残業も免除してもらえたし、こまめに休暇をとることもできた。そんな私が、上司や同僚の顔色を伺いながら中途退勤を願い出る必要もなく、たまには三、四時間の残業をする日が続いた。

玄関のドアが激しく叩かれるのでなにごとか出てみると、純一が目をひきつらせて立っていた。ことばをかける

間もなく、純一は私の脇の下をくぐり、部屋に駆け込むと四畳半の襖を内から閉めた。襖を開けると、部屋の隅に蹲った純一がしゃくりあげている。どうした、と覗き込もうとしたとき、妻が戻ってきた。

純一の腕には青痣が無数にあり、泥に汚れた頬からは血がにじみ出していた。これはと妻を見上げると、妻は首を横に振る。転んだのかと聞くと、違うと妻は言う。じゃあ、と私が言いかけると、視線を窓の外に移した。殴られたのか。妻は黙って頷く。私は窓辺に立ち、公園を見る。周囲の棟の主婦や子供たちが群れ、三つばかりの輪をつくっている。妻の視線の先には、この棟の世話役を一手に引き受けている私たちと同じ世代の主婦の姿がある。その主婦を中心に砂場のあたりに輪ができており、子供の一人が尻餅でもついたのか、三階の部屋にまで届く笑いが上がった。

もう一月になるといふ。純一が砂場にいると、それまでブランコやジャングルジムで遊んでいた子供たちがとんできて、純一を砂場から押し出すのだそうだ。押し出すばかりでなく、純一が抵抗らしい抵抗をしないのをいいことに、いつの間にか後ろにしるび寄り、小突き、蹴り、殴ったりしては逃げて行くという。

逃げて行っていた頃はまだいい方で、いまは大人たちが見ている前で平気で突き倒し、蹴り、ボールを投げつけたりするというのだ。

「あの人たち、自分の子供が純一にどんなことしたって、ちつとも注意しようとしてもしないの」

「そんなこと、なんで早く言わないんだ」血相を変え部屋をとり出そうとする私に、妻は必死の形相でしがみつき、「やめてちょうだい。相手の思うつぼよ。またこれ以上、もの笑いの種になるだけよ」と、肩を震わせる。

「純一が片輪にされてもいいと言うのか」弾む息の中でやつとそう言うと、妻は、でも純一、ここにきてまだ自家中毒を起こしてないのよ、と消え入りそうな声で言った。

その晩から始まった純一の自家中毒は、これまでにない激しいもので、柔らかめに煮たうどんを元の形のままに吐き出し、水分のありったけを吐き、胃液を吐き、吐くものがなくなると、ゴボツという気味の悪い音とともに血の色をしたものを大量に吐いた。目を閉じ動かなくなった純一は、すぐに入院、点滴となったが、退院したのは二十日が経つてのことだった。

病室で、純一の顔と変わらないくらいに蒼ざめた妻の手に、私は一枚の広告を握らせた。日当たりのいい庭に子犬が寝そべり、洋風玄関にパンジーの鉢が置かれた、建売住宅のチラシだった。

「いつか、先生が転地療法のことを言っただろう。空気の手きれいな、庭付きの四LDK。こいつに賭けてみないか」

妻は、殆ど興味を示そうとせず、力なく首を垂れ、目を

床に落とした。

田尻さんは、日曜日、約束の十五分前に現われた。午前八時四十五分。サラリーマンの出勤時間だ。

「きつとみんなと同じように元気になれるんだ。ね、私たちのお家を探すの頑張ってみよう」

妻が、まだ寝起きたばかりの純一に語りかける。二十日間の入院を終えるとき、妻は同じ病室の母親から「思いは実現する」という内容の本を紹介されたく、最初はしぶしぶページを繰っていたが、そのうち蛍光ペンを持ち出し、気に入った箇所マークをし始めた。

それ以来、といってもたかだか半年程度にしかならないが、懸命に、努めて明るく、楽しいイメージを自分に課すことにしているのだという。純一に対しても同様で、なにかの呪文のことばを耳元で囁いてやる。

「なんだか怪しげな感じがするな」私はそれがどこか新興宗教の儀式の類いに見え、あまり好きではないのだが、妻はちゃんとした心理学の先生の本だから心配ないと言う。ともあれ、妻自身が、その自分の蹲っていた位置から一歩を進めようとするのだから、とどめる理由もない。

田尻さんの運転する車は、型式の古いバンだった。

「マイカーですので、少し窮屈かもしれませんが」

服装こそ展示場でのものと変わらないが、二階建延べ五十坪の積分ハウスのモデル住宅を背にしたときの田尻さんと、あまりにも印象が違う。見ると、朝食にと車の中で齧ってきたのだろう餡パンの残りが袋のままダッシュボードの上ののっぺりしており、顎の下に剃り残しの髭があり、ネクタイの幅の半分がワイシャツの首からはみ出している。

「きつちり二キロです。いやあ、会社の土地部が、なかなか物件をよこしてくれないもので焦りました。とにかく、距離と価格はまず問題ありません」車は細い路地に入り、スピードを落としながら進んで行く。都心にある私たちの公団住宅の周囲二キロの距離に、こんな脇道があったとは信じられない、車一台がやっと通れる上り道である。

着きました、と田尻さんが言うのであたりを見回してみるのが、それらしい空地は見当たらない。躊躇していると、先に下りた田尻さんがドアを開けてくれる。

現場は、真上にあった。車を止めた場所の左手が土手になっており、その土手にとりついたコンクリートの打ちっばなしの階段を十段ばかり上ると、確かに草に埋もれかけてはいるが、間口十メートル、奥行十七、八メートルほどの均された土地が現われた。私は土地の中央に立ち、周囲を見渡してみた。細道からの高さ二メートル。前面には障害物はないのだが、裏が三メートルの土手になっている。

一巡りしながら、私はここに子犬を置き、洋風の玄関を置

いてみた。遅れて上ってきた妻と純一が、キャツと甲高い声をあげた。足元をなにかの虫が横切って行ったらしい。

「いかがです」田尻さんが及び腰で問い掛けながら、持ってきた図面を広げ、現場の位置を計っている。

「裏手の土手という障害物のことは予想していませんでした。立地の点でいささか安全性に欠けますし、空気の流れが遮られてしまいます。計画では、モデルNO一五、二十九坪がちょうど入るのですが」なんのことはない、田尻さん自身が気に入らない。眼鏡の奥の目を一、二度濁ませたと思うと、これはお勧めできません、とあっさり結論を出してしまった。妻と純一も、上ってきたばかりなのにすぐ下りねばならず、一体なにがあったのかという顔である。

田尻さんは、そそっかしいのでいつもお客さんに迷惑をかけるんです、と平謝りで帰って行った。

はみ出したネクタイに、剃り残しの髭。妻はさつさと土地を引っ込めてしまった田尻さんの、およそ営業マンらしからぬ人柄に、逆に魅了されてしまったらしかった。

「普通だったら、モデルのカタログぐらい置いて行くものよ。そうでないと、お客さん逃げてしまうじゃない。もっとも、私たちはお客さんの部類に入らないのかもしれないけれど」言われてみると、最初の電話まで二週間も掛かったことといい、今回次の約束もせずに戻って行ったことといい、淡泊過ぎる。バンのハンドルに額を打ちつけそうに

なるほど何度も頭を下げ、貴重な時間をお邪魔いたしました、と言って帰った田尻さんの頭には、商談のことなど入っていないかと思えてしまう。

「モデルNO一五って、どんなだったのかしら。せめて、手掛かりぐらい残して行ってくれればいいのに」

そんなことを言い合いながら、私たちは二、三の物件を巡った。田尻さんからの連絡はいつ入るともしれないし、足で探していると、これまで気付かなかった場所に、格好の土地を発見するのだった。しかし、持ち主を訪ねてみると、とんでもない価格を示されたり、当分売りに出すつもりはないと断られた。

「こんな場所が選べるのだったら、なにも苦労はしないのにね」妻の指し出す広告を見て、私は笑った。

公団住宅にほど近い位置で進められている市の区画整理の記事が、新聞の社会面に載っている。「行政と文教の融合する街。悠久の歴史と緑の中に佇まほろばの里」と、市側が進めている次世代へ向けての夢タウンづくりのプランが、大きくとりあげられている。

「一区画平均百五十坪。ずい分バカにしてると思わない、この街中で。いったいいくらもの値をつけるつもりなの。どう転んだって、私たちには関係ないことね」

田尻さんから、また二週間経って電話が入った。

海側に下った国道沿いで、古びてはいるものの落ち着いた団地になっており、目当ての家は路地奥にあった。半間ほどの狭いベランダにおむつや下着が干してあり、窓ガラスの奥に女の子の影が見えた。

田尻さんによると、相場よりかなり低い値で売りに出されているのだという。ただ、玄関への幅二メートルの通路を残し、四隅を隣接地に囲まれており、その点を気にしなければ買い得な物件だと、今度はかなり強気である。

私は、田尻さんの膨らんだ背広のポケットを見る。額に流れる汗を無造作に拭き、拭いたと思うと丸めたままのハンカチをポケットに突っ込む仕種が、何度続いたことか。そんな仕種を眺めていると、頭の中で、この地の上に立つモデルNO一五が、にわかに現実味を帯びてき始めた。

「ちよつと気持の整理がつかないわ。あの子、この家が売られることを知ってるのかしら」妻が低い声で言った。あの子と純一、きつと同じぐらいの歳よ、と首を傾げる。

田尻さんの顔が見る間に赤くなり、あの、お客さんにも迷惑を掛けるんですと言ったときの例の表情が浮き上がり、上体を四十五度に折って、しばらくその顔を上げようとしなかった。

田尻さんからは、その後都合三度話がきたが、電話の応答の段階で、バイパスの下、北斜面で一日中日射しのない

場所、隣に騒音の激しい機械部品工場がある場所、という具合で折り合いがつかなかった。そこで、二キロ以内という条件をはずし、少し広い範囲の物件も探してみてもどうだろうかという話をし、了解し合ったのだった。

そう話を決めたところで、純一の久しぶりの発作が始まり、二週間の入院となった。医師の話では、学齢になると大部分が発作から卒業するということであつたのに、純一の場合、変化の兆しはみられない。

入学後一学期が経過したが、学校での一日をまともに過ごしたのは、半分ぐらいのものであろうか。

学校からの帰り道や砂場では、変わることなく殴られ、小突かれ、青痣や打ち身の絶えることはないのだが、純一自身が登校しないと行って抵抗したことはなく、相変わらず砂場にも出掛けて行くので、私たちがそれを止める手だてもない。下校中、団地の子とみられる四、五人が純一をとり囲み、スリッパ入れて殴りつけ、排水溝に突き落としたりする場面を妻は幾度も目のあたりにしたと言い、その度に唇を噛みしめる。

スレート屋根の通りに立っただけで、三笠ホームのモデル住宅のテントには寄らないまま、私たちは田尻さんのバンの戻り坂道を下り始めた。

田尻さんの持ってきた物件である（新たな二キロ以上の

場所〕で小一時間を過ごし、通り掛かりついでの幟に引かれ、三笠ホームの分譲地を覗いてみたのだった。田尻さんは、私たちが、他社の三笠ホームの街並みに見入っている間も不快な顔を見せず、バンの近くで待っていてくれた。

私たちは無言のまま坂を下ってきたが、妻が「一度、積分ハウスのモデルNO一五の実物を見せていただけませんか」と言い出したため、田尻さんはしばらく、どの展示場にしようかと言い、思案を巡らしているふうであったが一人頷くと、急遽行き先を変更した。

バンは私たちの団地横をすり抜け、市の中心部へと入って行く。そして、「まほろばの里」の看板をくぐり、区画整理の中の六メートル道路を直進し、二度目の角を曲がったところで止まった。

「例の百五十坪」私と妻は同時に叫んだ。純一も私たちの声に驚いたのか、目を見開いた。先日、新聞の社会面に載っていた次世代へ向けての夢タウンづくり。一区画平均百五十坪という破格の広さ。

二区画を跨いだ三百坪を用い、ほぼ完成した洋風建物の入口に、この辺りの有力者である島津邸建築現場という表記がある。毎日、アパートから遠くに眺めてきた建物である。

「こちらはモデルNO一五の兄貴格で、実物はこのモデルにそっくりといってさしつかえありません。もっともNO

一五の建坪は、この約半分ということになります」

高さ二メートルの塀をめぐらした鉄鈍色の建物は、青空を背景にそそり立つ伽藍を思わせ、目眩を催させるほどの威容だった。やがて芝生が張られるであろう庭はすでに均され、その庭だけでも五十坪はあるのだと思われた。

「めったに出ない土地です。ゆうに億を超えますね」

田尻さんは、頭髮が垂れ掛かってきた眼鏡を左指で持ち上げ、眼鏡の奥の目を丸く、大きく見開いた。

「あと一千万円頑張ってみませんか。二キロも三キロも郊外に出るより、一等地の四十坪を選ぶ方をお勧めします。その方が子供さんの病気にも、病院にも都合がいいし、先のことを考えるとずっと賢明だと思いますが」これまで数回会っている地元の小さな工務店の社長は、煙草の灰を指先で軽く叩きながら、おもむろに言った。

私たちは、距離を郊外に伸ばすことで総額を控ええようとしてきたのだったが、社長は逆の提案をした。しかも、社長の手元には、区画整理地内の、例の積分ハウスの三百坪から道路一つしか隔てていない区画の図面がある。

「百五十坪の数区画を保有している関係で、お客様の希望により、一区画を数区画に分け、用だてすることもできます」私たちの話を三十分近く黙って聞いた後で、敷地四十坪、建物延べ二十坪、総額三千五百万円でどうかと言う。

「条件に不満などないのですが、予定している額との違いがあまりにもあり過ぎます」

社長は、ゆっくり頷き、「すべてを一度に満たそうとするか。あるいは、今回は肝心のこの土地に焦点をしばらく、将来余裕が出てきたときに建て増しをするという二段構えで行くか、ですね」と言い、私たちが後者を選択し、当面の資金が予定より超過するとしても、先々どうにもならないという範囲でもないですよ、と足を高く組み替えた。

私たちは、初めて自から田尻さんに電話を入れた。地元工務店の社長の話は十分納得できるものであり、なにより妻がこの場所に乗り気だった。

「覚えてるかしら。区画整理地の中に入ったときの純一のこと。あの子が笑ったの。屈託なく笑ったのよ。でも、私たちには、確かに破格の金額過ぎるのよね」

なんのために田尻さんと呼ぶのか、私は、自分でもよく説明がつかなかった。田尻さんは、どうやりくりをつけたのか、間を置かずに団地にバンで到着し、私たちを地元工務店の社長の持つ区画に案内した。

「ここに、積分ハウスの、どんな小さなモデルでもいいのですが」私の性急な問い掛けに、田尻さんは眼鏡の奥の目を細めながら、「分かりました。しかし、今回は土地を選ばれることが一番だと思います。この土地であれば、建物

の方は二の次と考えてよいのではないでしようか」と、さりりと言った。その田尻さんの後背に、道路一つ隔てた積分ハウスの島津邸の鉄鈍色の伽藍がそそり立ち、サッシガラスにゆっくりと雲が流れて行く。

田尻さんは、折りからの風に乱れて垂れた頭髪を、眼鏡と一緒に左指でひよいと持ち上げ、微笑みながら、剃り残しのある顎を太い手の平で二、三度こすった。 (了)